

元亨版『和語灯録』と『西方指南抄』の比較対照①

市川 定敬

〔抄録〕

金沢文庫蔵の『三部経大意』は『和語灯録』所収の「三部経釈」と同じ内容を持ちながら、至誠心釈については他の法然遺文には見られない特異な記述を有する文献である。この特異な至誠心釈について、『和語灯録』編纂者である了慧道光による削除の可能性が先行研究によって指摘されている。本研究ノートは、最古の『和語灯録』版本であり、了慧の存命中に開版されている元亨版

『和語灯録』と、これよりも成立の古い『西方指南抄』を比較することによって、間接的にはあるが、了慧による編集傾向を概観し、その可能性について考察する資料とするものである。

キーワード 元亨版『和語灯録』、『西方指南抄』、『三部経大意』

本研究ノートは、金沢文庫蔵『三部経大意』の至誠心釈が、了恵による削除である可能性を検討するために、元亨版『和語灯録』（一二二一年）とそれよりも古い成立である『西方指南抄』（一二五六―一二五七年）とを比較したものである。両書に並行する文献は次の通りである。（一）内は『指南抄』のタイトル）

- 「三心義」〔「十七条法語」のうちの「一法語」〕
- 「念仏大意」〔「念仏大意」〕
- 「九条殿下の北政所へ進する御返事」〔「九条殿北政所御返事」〕

- 「鎌倉の二位の禅尼へ進する御返事」〔「鎌倉二位禅尼に答ふる書」〕
- 「要義問答」〔「要義問答」〕

- 「大胡太郎実秀へつかはす御返事」〔「大胡太郎実秀に答ふる書」〕
- 「大胡太郎実秀か妻室のもとへつかはす御返事」〔「大胡太郎実秀の妻に答ふる書」〕
- 「熊谷の入道へつかはす御返事」〔「熊谷へ遣はす書（九月十六

日付」]

- 「津戸の三郎入道へつかはす御返事」[「津戸の三郎に答ふる書」]

- 「黒田の聖人へつかはす御文」[「黒田の聖へ遣はす書」]

- 「越中光明房へつかはす御文」[「光明房に答ふる書」]

- 「正如房へつかはす御文」[「正如房へ遣はす書」]

- 「十二の問答」[「或人念仏之不審聖人に奉問次第」]

本研究ノートはこれら全てを比較した。今回は「要義問答」までを掲載する。

〈凡例〉

- ・元亨版『和語灯録』は『龍大善本叢書十五 黒谷上人語灯録（和語）（同朋舎出版）』を用い、佛教大学四条センター『黒谷上人語灯録（和語）テキスト』を参照し改行、句読点を付した。『指南抄』は『親鸞聖人真蹟集成』第五・六巻（法蔵館）を用いた。

- ・元亨版『和語灯録』を基とし、その上から『西方指南抄』の異同を記した。

- ・元亨版に存在し、『指南抄』に存在しない記述は二重線の取消線で記した。

- ・元亨版には存在せず、『指南抄』に存在する記述は太ゴチで記した。したがって、了恵による削除の可能性のある箇所は、太ゴチで記される箇所である。

- ・本研究ノートの目的はあくまでも、上述の了恵による削除の可能

性を検討するものであるので、成立状況等を考察する上では看過すべきではない、音便変化による記述の違い（念仏せん↓念仏せむ）や、文意が変わらない範囲での記述の異同（阿弥陀ほとけ↓阿弥陀仏）について厳密には指摘していない。

「三心義」「十七条法語」より（『指南抄』は漢文）

観无量壽經には、若有衆生 願生彼國者 發三種心 即便往生 何等爲三 一者至誠心 二者深心 三者廻向發願心 具三心者 必生彼國といへり。往生禮讃には、三心を釋しおはりて云く、具此三心者 必得往生也 若少一心 即不得生といへり。しかれば則ち尤も三心を具すべきなり。

一に至誠心といふは、眞實の心なり。身に禮拜を行ひし、くちに名號をとなくふ、心意に相好をおもふ、みな眞實心をもちてせよとなり。すく惣してこれをいふに、厭離穢土をいとひ欣求淨土をねがひて、もろもろの修諸行業を修せんもの、みな眞實心をもてつとむべし。これを勸修せんはすへし、ほかには賢善精進の相を現して、うちには愚惡懈怠の心をいたまてけり、所修するところの行業は、日夜十二時にひまなくこれを行すとも往生をえす。ほかには愚惡懈怠のかたちをあらはして、うちには賢善精進の事も念に住してこれを修行するものせは、一時一念なりともといえどもその行むなからず。かならず往生をも得む。これを至誠心となつく。

二に深心といふは、ふかく信する心なり。これについて二あり。一にはわれはこれ罪惡不善の身なり、无始よりこのかた六道に輪廻して、

往生の縁なしと信し、二には罪人なりといへとも、ほとけの願力をもて強縁としすれば、かならず往生をえん事得と信す。うたかひなくあらおもひなしと信すおもむはかりなれとなり。

これについて又二あり。一には人につきて信をたつ、二には行につきて信をたつ。人につきて信をたつとゆふは、出離生死のみちおほしといへとも、大きにわかちて二あり。一には聖道門、二には淨土門なり。

聖道門といふは、この娑婆世界にして煩惱を斷し、菩提を證するみちなり。淨土門といふは、この娑婆世界をいとむうて、かの極樂をねかひふて、善根を修する門なり。二門ありといへとも、聖道門をさしおきて淨土門に歸するなり。しかるにもし人ありておほく經論をひきて、罪惡の凡夫往生する事をえしといはん。このことはをまきてきくといへとも退心をなます生せず、いよいよ信心をますべし。ゆへはいかんとなれば、罪障の凡夫の淨土に往生すといふ事はするは、これ釋尊の誠言なり、凡夫の妄執にあらず。われすてに佛の言を信してふかく淨土を欣求す。たとひ諸佛菩薩きたりて、罪障の凡夫淨土にむまゐるべからずれすとの給ふとも、これを信すべからず。ゆへいかにとなれば何を以ての故に、菩薩は佛の弟子なり。もしまことにこれ菩薩ならは佛説をにそむくべからず。しかるにすてに佛説にたかひて違して往生をえすしとの給ふ。ま事眞の菩薩にあらずといふことを。是の故に信すべからずと。又佛はこれ同體の大悲なり。ま事実にこれ佛ならは釋迦の説にたかふべからずと。しかればすなはち阿彌陀經に、一日七日阿彌陀陀の名號を念してすれば、かならずむまゐる事往生をうと

とけり。いへるはこれを六方恆沙の諸佛、釋迦佛におなじく虚しからすとこれを證誠に給へり。しかるにいま釋迦の説をにそむきて往生せずをえしといふ。かるかゆへにしりぬ。ま事實のほとけにあらずと。これ天魔の變化なり。この義をもてのゆへに、依り信すべからずと。佛菩薩の説なりとも尚ほ以て信すべからず。いかにいはんや餘説をや。なまたちか執するところゆ大小ことなりといへとも、みな同じ佛果を期する穢土の修行は、聖道門の心意なり。われらか修するところは、正雜不聞なれとも同じからず、ともに極樂をねかふ往生の行業は淨土門の心なり。聖道門はこれ汝ちか有縁の行なり、淨土門といふはわれちか縁の行なり、これをもてかれを難すべからず、かれをもてこれを難すべからず。かくのことく信するものを、是を就人立信人につきて信を立つとなづく。

つきに行につきて信をたつといふは、往生極樂の行まちまちなりといへとも、二種をはいてす。一には正行、二には雜行也。

正行といふは、阿彌陀佛におきいてしたしきの親行なり。雜行といふは、阿彌陀佛におきいてもとまきの疎行なり。まつ正行といふは、これにつきて五あり、一にはいはく讀誦、いはく三部經をよむなり。二には觀察、いはく極樂の依正を觀する也。三には禮拜、いはく阿彌陀佛を禮拜するしたてまつる也。四には稱名、いはく阿彌陀の名號を稱する也。五には讚嘆供養、いはく阿彌陀佛を讚嘆し供養するしたてまつる也。この五をもてあはせ合して二とす。一には一心にもは阿彌陀の名號を專念して、行住坐臥に時節の久近をとはず、念々にすてざるは、これを正定の業とな

つく。かのほとけの仏願に順するかゆへに。二にはさきの五かの中かに稱名のほか已外の禮拜讀誦等をはみな助業となつく。

つきに雜行といふは、さきの五種の正助二業をのそきて已外の、もろもろの讀誦大乘發菩提心持戒勸進行等ゆ一切ゆ行なり。

この正助雜二行につきいて五種の得失あり。一には親疎對、ゆはゆあいはく正行は阿彌陀佛にせし遠なり、三には有間無間對、ゆはゆあいはく正行はおもひをかくるに係念無間なし也、雜行は思をかくるに係念間斷ありす、四には廻向不廻向對、ゆはゆあいはく正行は廻向をもちゐされともさるにおのつから往生の業となる。雜行は廻向せざる時は往生の業とならず、五には純雜對、ゆはゆあいはく正行は純に往生極樂の業也。雜行はしからず。十方ゆ淨土乃至人天の業に通ずる也。かくのこときく信するをは就衛立備行について信を立つとなつく。是れを深心と名つく。

三には廻向發願心といふは、過去および今生の身口意業に修するところの一切の善根を、眞實の心をもて極樂に廻向して往生を欣求する也。これを廻向發願心となつく。この信心を果しめれば、かならず往生する也。

「念佛大意」〔念仏大意〕

末代惡世の衆生の心さしをいたさんにおきては、又他のつとめあるへからず。たた善導の釋について一向專修の念佛門にいるへき

也。しかるを一向に信をいたして、その門にいる人はきわめてありかたし。そのゆへは、あるいは他の行に心をそめ、あるいは念佛の功德能をおもくせざるなるへし。つらつらこれをおもふに、まししく往生淨土の願ねかひ、ふかき心をもはらにする人、ありかたきゆへか、まつこの道理をよくよく心うへき也。

すへて天台法相の經論も聖教も、そのつとめをいたさんに、一つとしてあたなるへきにはあらず。たたし佛道修行は、よくよく身をはかり、時をはかるへきなり。佛の滅後第四の五百年にたに、智慧をみかきて煩惱を斷する事かたく、心をすまして禪定をえん事かたきかゆへに、人おほく念佛門にいりけり。すなはち道綽善導等の淨土宗の聖人、この時の人なり。いはんやこのころは、第五の五百年、鬪諍堅固の時也。他の行法さらに成就せん事かたし。しかのみならず、念佛におきては末法ののちなを利益あるへし、いはんやいまの世は末法萬年のしめ也。一念も彌陀を念せんに、なんぞ往生をとけざらんや。たとひわれもそれらそのうつは物にあらずといふとも、末法のすゑの衆生には、さらににるへからず。かつもは又釋尊在世の時すら、即身成佛におきては、龍女のほかはいとありかたし。たとひ又即身成佛までにあらすといふとも、この聖道門をおこなひあひ給ひけん菩薩聲聞たち、そのほかの權者ひしりたち、そののちの比丘比丘尼等、いまにいたるまで經論の學者、法花經の持者いくそはくそや。ここにわれら、なましゐに聖道をまなふといふとも、かの人々にはさらにおよふへからず。かくのこときの末代の衆生を、阿彌陀はとけかねてさとり給ひて、五劫のあひた思惟して四十八願をおこし給へり。そのなかの第十八の願に

いはく、十方の衆生心をいたして、信樂してわかくにむまれんとねかひて、乃至十念せんに、もしむまれすといはは正覺をとらしとちかひ給ひて、すてに正覺をなり給へり。これを又釋尊とき給へる經、すなはち觀无量壽等の三部經なり。しかれはかの經はた念佛門也。たとひ惡業の衆生等、彌陀のちかひはかりに、なを信をいたすといふとも、釋迦のこれを一々にとき給へる三部經、あにひとまは言もむなしからんや。そのうゑ又、六方十方の諸佛の證誠、この經等に見えたり。他の行におきては、かくのこときの證誠見えざるか。しかれは時もすぎ、身にもこたふましからん禪定智恵を修せんよりは、利益現在にして、しかもそこそはくのほとけたちの證誠し給へる彌陀の名號を稱念すべき也。

そもそも後世者のなかに、極樂はあさく彌陀はくたれり、期するところ密嚴花藏等の世界なりと、心をかくる人も侍るにや。それはなはたおほけなし。かの土は斷无明の菩薩のほかはいる事なし。又一向專修の念佛門にいるなかに、日別に三萬遍、もしくは五萬遍十萬遍乃至十萬遍といふとも、これをつとめおはりなんのち、年來受持讀誦の功つもりたる諸經をもよみたてまつらん事、つみになるへきかと不審をなして、あさむくともからもましわれり。それづみになるへきにては、いかてかは侍るへき。末代の衆生、その行成就しかたきによりて、まつ彌陀の願力にのりて念佛の往生をとけてのち、淨土にて阿彌陀如来觀音勢至にあひたてまつりて、もろもろの聖教をも學し、さとりをもひらくへきなり。

又末代の衆生、念佛をもはらにすへき事その釋おほかる中に、かつ

は十方恆沙のほとけ證誠し給ふ。又觀經の疏の第三に善導の給云はく、自餘衆行雖名是善 若比念佛者 全非比校也 是故諸經中 處々廣讚念佛功能 如无量壽經四十八願中 唯明專念彌陀名號得生 又如彌陀經中 一日七日專念彌陀名號得生 又十方恆沙諸佛證誠不虛也 又此經中定散文中 唯標專念名號得生 此例非一也 廣顯念佛三昧竟とあり。又善導の往生禮讚のなかのならひに、專修雜修淨業の文等にも、雜修のものは往生をゆるとくる事、萬かなかに一二なをかたし。

專修のものは、百に百なからむまるといへり。これらはすなはち、何事もその門にいりなんには、一向にもはら他の心あるへからざるゆへなり。たとへは今生にも主君につかへ、人をあひたのむみち、他人に心さしをわくると、一向にあひたのむと、ひとしからざる事也。たたし家ゆたかにして、のり物僅僕もかなひ、面々に心さしをいたすちからもたへたるともからは、かたかたに心さしをわくといへとも、その功むなしからず。かくのこときのちからにたへざるものは、所々をかぬるあひた、身はつかるといへともそのしるしをえかたし。一向に一人をたのめは、まつしき物もかならずそのあはれみをうる也。すなはち末代惡世の無智の衆生は、かのまつしき物のこととなり。むかしの權者聖人は、家ゆたかなる衆生のこととき也。しかれは無智の身をもちて、智者の行をまなはんにおきては、まつしき物貧者の得徳人をまなはんかとき也。又なをたとひをとらは、たかき山の、人もかよふへくもなからん巖石を、ちからたへさらんもの、いしのかと木の根にとりすかりてのほらんとはけまは、雜行を修して往生をねかはんかこととなり。かの山のみねより、つよきつなをおろしたらんにす

かりてのほらんは、彌陀の願力をふかく信して、一向に念佛をつとめ
はて、往生せんかことなるへし。

又一向専修には、ことに三心を具足すへき也。三心といふは、一に
は至誠心、二には深心、三には廻向發願心也。至誠心といふは、餘佛
を禮せず、彌陀を禮し、餘行を修せず、彌陀を念して、もはらにして
もはらならしむる也。深心といふは、彌陀の本願をふかく信して、わ
か身は無始よりこのかた罪惡生死の凡夫一度として生死をまぬかるへ
きみちなきを、彌陀の本願不可思議なるによりて、かの名號を一向に
稱念して、うたかひをなす心なければ、一念のあひたに八十億劫の生
死のつみを滅して、最後臨終の時かならず彌陀の來迎にあつかる也。
廻向發願心といふは、自他の行を眞實の心の中に廻向發願する也。こ
の三心一つもかけぬれば、往生をとけかたし。しかれば他の行をまし
えんによりて、罪になるへからすといふとも、なを念佛往生を不定
に存して、いささかのうたかひをのこして、他事をくわふるにて侍る
へき也。たたしこの三心のなかに、至誠心をやうやうに心えて、こと
にまことをいたす事を、かたく申しなすともからも侍るにや。しから
は彌陀の本願の本意にもたかひて、信心はかけぬるにてあるへき也。
いかに信力をいたすといふともかゝる、造惡の凡夫の身みの信
力にて願わかひを成就せんほととの信力は、いかてか侍るへき。たた一
向に往生を決定せんすればこそ、本願の不思議にては侍るへけれ。さ
やうに信力もふかく、よからん人のためには、かゝるあなかに不
思議の本願をおこし給ふへきにあらす。この道理をは存しなから、ま
事しく専修念佛の一行にいる人はいみしくありかたき也。

しかるを道綽禪師は決定往生の先達なり。智恵ふかくして講説を修
し給ひき。曇鸞法師の三世已下の弟子也。かの曇鸞師は智恵高遠なり
といへとも、四論の講説をすてて、念仏門にいらたまはむや。わか
るところ、さわるところ、なむそおほしとするにたらむやとおもひ
りて涅槃の講説をすてて、ひとへに往生の業を修して、一向にもはら
彌陀を念して、相續無間にして、現に往生し給へり。かくのとき道
綽は、講説をやめて念佛を修し、善導は雜修をきらひて専修をつとめ
給ひき。又道綽禪師のすすめによりて、并州の三縣の人、七歳出以後
一向に念佛を修すといへり。しかればわか朝の末法の衆生、なんそあ
なかに雜修をこのまんや。たたすみやかに彌陀如來の願、釋迦如來
の説、道綽善導の釋をまなぶまもるに、雜修行を修して極樂の果を不
定に存せんよりは、専修の業を行して、往生ののそみを決定すべきな
り。またかの道綽善導等の釋は、念佛門の人々の事なれば左右におよ
ふへからす。法相宗においては、専修念佛門をばことに信向せざるか
と存するところに、慈恩大師の西方要決にはく、末法萬年餘經悉滅
彌陀一教利物偏増と釋し給へり。又おなしき書にはく、三空九斷之
文 十地五修之訓 生期分促死路終非運 不如暫息多聞之廣學 專念
佛之單修といへり。しかのみならず、又大聖竹林寺の記にはく、
五臺山竹林寺の大講堂の中にして、普賢文殊東西に對座して、もろも
ろの衆生のために妙法をとき給ふ時、法照禪師ひさまつきて、文殊に
問たてまつりき。未來惡世の凡夫、いつれの法をおこなひてか、なか
く三界をいて淨土にむまるる事をうへきと。文殊こたへての給はく、
往生淨土のはかり事、彌陀の名號にすきたるはなく、頓證菩提のみち、

たた稱念の一門にあり。これによりて釋迦一代の聖教におほくほむるところ、みな彌陀にあり。いかにいはんや、未來惡世の凡夫をやと、こたへ給へり。

かくのこときの要文等、智者たちのおしへを見ても、なを信心なくして、ありかたき人界をうけて、ゆきやすき淨土にいらさん事、後悔なに事かこれにしかんや。かつは又、かくのこときの專修念佛のともからを、當世にもはら難をくわえて、あざけりをなすともからおほきこゆ。これ又むかしの權者たち、かねてまづみなさとりしり給へる事也。文殊の給はく、於未來世惡衆生稱念西方彌陀號依佛本願出生死以直心故生極樂云云。善導の法事讃にいはく、世尊說法時將了慇懃付囑彌陀名五濁増時多疑謗道俗相嫌不用聞見有修行起瞋毒方便破壞競生怨如此生盲闇提輩毀滅頓教永沈淪超過大地微塵劫未可得離三途身大衆同心皆懺悔所有破法罪因緣本末。又平等覺經にいはく、もし善男子善女人ありて、かくのこときの淨土の法門をとくをききて、悲喜をなして身の毛ゆよたつ事をなして、ぬきいたすかことくするは、しかるへし。この人過去にすてに佛道をなしてきたる也。もし又これをきくといふとも、すへて信樂せさらんにおきては、しるへし。この人はしめて三惡道のなかよりきたれる也。しかれば、かくのこときの謗難のともからは、左右なき罪人のよしをしりて、論談にあたふへからさる事也。

又十善かたくもたすして切利都率をねかはん事、きはめてかなひかたし。極樂は五逆のもの念佛によりてむまる、いはんや十惡におひきては、さわりとなるへからす。

又慈尊の出世を期せんにも、五十六億七千萬歳、いとまちとを也。いまたしらす、他方の淨土そのところにはかくのこときの本願なし、極樂はもはら彌陀の願力はなはたふかし。なんそほかをもとむへき。

またこのたひ佛法に縁をむすひて、三生四生に得脱せんとのそみをかくるともからあり。この願きわめて不定也。大通結縁の人、信樂慚愧のころものうらに、一乘無價の玉をかけて、隔生即亡して、三千塵點かあひた、六趣に輪廻せしにあらすや。たとひ又、三生四生に縁をむすひて、必定得脱すへきにても、それをまちつけん輪廻転のあひたのくるしみ、いとたへかたかるへし、いとまちとをなるへし。又かの聖道門においては、三乘五乘の得道也。この行は多百千劫也。ここにわれらこのたひはしめて人界の生をうけたるにてもあらず。世々生々をへて、如來の教化にも、菩薩の弘經にも、いくそはくかあひたてまつりたりけん。たた不信にして教化にもれきたれるなるへし。三世の諸佛、十方の菩薩、思へはみなこれむかしのとも也。釋迦も五百塵點のさき、彌陀も十劫成道のさきは、かたしけなく父母師弟とも、たかひになり給ひけん。ほとけは前佛の教をうけ善知識のおしへを信して、はやく發心修行し給ひて成佛してひさしくなり給にけり。われらは信心おろかなるかゆへに、いまに生死にとまれるなるへし。過去の輪轉をおもへは、未來も又かくのこと。たとひ二乗の心をおこすといふとも、菩提心をおこしかたし。如來は勝方便にしておこなひ給へり。濁世の衆生、自力をはけまきんには、百千萬億劫難行苦行をいたすといふとも、その勤およふところにあらず。

又かの聖道門は、よく清淨にしてそのうつは物にたれらん人のつとむへき行也。懈怠不信にしては、中々行せきめむしめむよりも罪業の因となるかたもありぬへし。念佛門におゆきては、行住坐臥ねてもさめても持念するに、そのたよりとかなくして、そのうつは物をきらはす、ことごとく往生の因となる事、うたかひなし。

彼佛因中立弘誓 聞名念我惣來迎來 不簡貧窮將富貴 不簡下智與高才 不簡多聞持淨戒 不簡破戒罪根深 但使廻心多念佛 能令瓦礫變成金

といへり。又いみしき經論聖教の智者といへとも、最後臨終の時、その文を暗誦するにあたはす。念佛におゆきては、いのちをきわむるにいたるまで、稱念するにそのわつらひなし。

又ほとけの誓願のためしをひかんに、藥師の十二の誓願には不取正覺の願なく、千手の願は又不取正覺とちかひ給へるも、いまた正覺なり給はず。彌陀は不取正覺の願をおこして、しかも正覺なりてすてに十劫をへ給へり。かくのこときの彌陀のちかひに信をいたささらん人は、又他の法門をも信仰するにおよはす。しかれば返々も一向專修の念佛に信をいたして、他の心なく、日夜朝暮、行住坐臥におこたる事なく稱念すへき也。專修念佛をいたすともから、當世にも往生をとくるきこへ、そのかすおほし。雜修の人におゆきては、そのきこへきわめてありかたしき也。

そもそもこれを見ても、なをよこさまのひかるんにいりて、物難せんとおもはんともからは、さためていよいよいきとをりをなして、しからはむかしよりほとけのときをき給へる經論聖教、みなもて无益の

いたつら物にて、うせなんとするはこそなんと、あさけり申さんすらん。それは天台法相の本寺本山に修學をいとなみて、名利をも存し、おほやけにもつかへず、官位をもそのまんとおもはん人におゆきては、左右におよふへからず。又上根利智の人は、そのかきりにあらず。この心えてよく了見する人は、あやまりて聖道門をことにおもくするゆへと存すへき也。しかるをなを念佛にあひかねてつとめをいたさん事は、聖道門をすてに念佛の助行にもちあるへきか、その條こそ、返々かへりて聖道門をうしなふにては侍りけれ。たたこの念佛門は、返々も又他の心なく後世を思はんともからの、よしなき僻胤におもむきて、時をも身をもはからず、雜行を修して、このたひたまたまありかたき人界にむまれて、さはかりあひまうあひかたかるへき彌陀のちかひをすてて、又三途の舊里に返りて、生死に輪轉して多百千劫をへんかなしさを、思ひしらん人の身のためを申也。さらば諸宗のいきとほりには、およふへかざる事也。

「九條殿下の北政所へ進する御返事」〔九條殿北政所御返事〕

かしこまりて申あけ候。さては御念佛申させおはしまし候ゆんなるこそ、よにうれしく候へ。ま事に往生の行は、念佛かめてたき事にて候也。そのゆへは、念仏は彌陀の本願の行なれは也。餘の行はそれ眞言止觀のたかき行法なりといへとも、彌陀の本願にあらず。又念佛は釋迦如來の付屬の行也。餘行はまことに定散兩門のめてたき行也といへとも、釋尊これを付屬し給はず。又念佛は六方の諸佛の證誠の行也。餘行はたとひ顯密事理のやんことなき行なりとゆへとも申せとも、

諸佛これを證誠し給はず。このゆへに様々の行おほしとよく候へとも、往生のみちにはひとへに念佛かすくれたる事にて候也。

しかるに往生のみちにとき人の申すやうは、餘の眞言止觀の行にたえざる人の、やすきままのつとめてこそ念佛はあれと申すは、きわめたるひか事に候也。そのゆへは、餘行をは彌陀の本願にあらすさる余行をきらひすて、又釋尊の付屬にあらざる行をはえらひととめ、又諸佛の證誠にあらざる行をはとめやめおさめて、いまはた彌陀の本願にまかせ、釋尊の付屬により、諸佛の證誠にしたかひて、おろかなるわたくしのはからひをはとめやめて、これらのゆへ、つよき念佛の行を備つとめて、往生をはいのるへしと申す事にて候也。まこれは惠心の僧都の往生要集に、往生の業は念佛を本とす申たるは、この心也。

いまはたた餘行をとめ捨て、一向に念佛にならせ給ふへし。念佛にとりても、一向專修の念佛かめてたき事にて候也。そのむねは三昧發得の善導和南の觀經の疏に見えて候たり。しかのみならずまた、雙卷經には一向專念无量壽佛とき給ひへり。およそ一向のことはは、二向三向に對して、ひとへに餘の行をえらひすてきらひのそく心也。君達なんとの御いのりの料なんにも、念佛かめてたき事にて候へは、往生要集にも餘行のなかに念佛すくれたるよし見へ候たり。又傳教大師の七難消滅の法にも、念佛をつとむへしと見えて候。おほよそ十方諸佛、三界の天衆の擁護し給ふ妄語したまはぬ行にて候へは、現世後生の御つとめ、何事かこれにすぎ候はんへきや。いまはたた一向專修の但念佛者にならせ給ふおはしますへく候。

「鎌倉の二位の禪尼へ進する御返事」〔鎌倉二位禪尼に答ふる書〕

御文くはしくうけ給はり候ぬ。まては念佛の功德は、佛もときつくしかたしとの給へり。又智惠第一の舍利弗、多聞第一の阿難も、念佛の功德はしりかたしとの給ひし廣大の善根にて候へは、まして源空なれとは申つくすへくも候はず。源空この朝にわたりて候聖仏教を隨分にひらき見候へとも、淨土の教文はまの朝にわたらずとかんかへ候て、わづかに ○ 震旦よりとりわたして候聖教の心をたにも、一年二年なんにては申つくすへくもおほへ候はず。さりながらも、おほせかふりて候へはたまわりたることなれは申のへ候へし。

まづ念佛を信せざる人々候ひての申候なる事は、くまかやの入道、つのとこの三郎は、无智のものなれはこそ餘行をはせさせすして、念佛はかりをは法然房はすすめたれと申候なる事、きわまりなめたるひか事にて候也。そのゆへは、念佛の行はもとより有智无智をえらはす、彌陀のむかしのちかひ給ひし本大願は、あまねく一切衆生のためなり。无智のためには念佛を願とし、有智のためには餘行を願とし給ふ事なし。十方世界の衆生のため也。有智无智、善人惡人、持戒破戒、貴も賤も、男も女もへたてず。もしとは佛の在世の衆生、もしくは佛の滅後の衆生、もしくは釋迦の末法萬年のちに三寶みなうせてののちの衆生まて、たた念佛はかりこそ現當の祈禱とはなり候はゆへ。善導和尚は彌陀の化身にて、ことに一切衆生をあはれみ給ひて、一切の聖教をかかんてかかみて、專修の念佛をすすめ給へるも、ひろく一切衆生のため也。方便の時節末法にあたりてたるいまの教これ也。されは無智の人のみ身にかきらす、ひろく彌陀の本願をたのみて、あまねく善導

の御心にしたかひて、念佛の一門をすすめ候はんに、いかてかに无智の人のみにかきりて、有智の人をはへたてて往生せさせしとはし候はんや。もしからすは、彌陀の本大願にもそむき、善導の御心にもかなふへからず。しかればすなわちこの邊にまうてきて、往生のみちをとひたつね候にほも、有智无智を論せず、ひとへに専修念佛をすすめ候なり。

かまえてさやうに専修の念佛を申しとめんとつかまつる人は、さきの世に念佛三昧得道の法門をきかすして、ゆめの後世に又さためて三惡道にかえらるおつへきものの、しかるへくしてさやうに申候也。そのゆへは聖教にひろく見えて候也。されはしかればすなはち、修行する事あるをみては毒心をおこして、方便してきおひうてあたをなす。かくのこときくの生盲闍提のともからず、頓教を毀滅してなく沈淪す。大地微塵劫を超過すとも、いまた三途の身をはなれんる事を得ず。かからずとき給へり。見有修行起瞋毒 方便破壊競生怨 如此生盲闍提輩 毀滅頓教永沈淪 超過大地微塵劫 未可得離三途身 大衆同心皆懺悔 所有破法罪因縁。この文の心は、淨土をねかひ念佛を行する人を見ては毒心をおこし、ひか事をたくみめくらし、様々の方便をなして専修の念佛の行をやふり、あたをなして申ととむるに候也。かくのことくの人は、むまれてより佛性ぶつじやうのまなこしゐて、善根のたねをうしなへる闍提人のともからなり。この彌陀の名號をとなへて、なかき生死をはなれて、常住の極樂に往生すへけれども、この教法をそしりほろぼして、このつみによりてなく三惡道にしつむとき。かくのこときこときの人は、大地微塵劫をすくれとも、なく三途の身をは

なれん事あるへからずといふ也。

しかればすなはち、さやうにひか事を申し候らむ人をは、かへりてあはれみ給ふへきもの也。さ程の罪人の申しによりて、専修念佛に懈怠をなし、念佛往生にうたかひをなし、不審をいとおこさん人は、いふばかりひなき事にこそ候はめ。およそ彌陀に縁あさく、往生の時いたらぬ物は、きけとも信せず、念佛のものを見ればはらたち、こゑをききてはいかりをなして、あしき惡事也んと申すはなれとも、經論にも見へきぬ事を申す也。御心をえさせ給ひて、いかに申すとも御心はかりは御變改候へからず。あなかに信せさらん人をは、御すすめ候へからず。ほとけなをちからおよひ給はす、いかにいはんや凡夫のちからはおよましく候。かかる不信の衆生をおもへは、過去の父母兄弟親類なりとおぼしめし候ておもひ候にも、慈悲をおこして念佛かかて申て極樂の上品上生にまいりてさとりをひらきて、生死に返りゆりて誹謗不信の人をもむかえんと善根を修してはおほしめすへき事にて候也。このよしを御心え候あるへきなり。

一、雜行異解の人々の餘の功德を修せんするには、財寶をあひ助成しておほしめすへきやうは、されはこれ我はこの一向専修にて決定して往生すへき身也。他人のとをきみちを、わか近き道布に結縁せさせんとおほしめすへき也。そのうゑに専修をさまたけ候はきゆねは、結縁番せんにもとかなし。

一、人々の堂をつくり、佛をつくり、經をかき、僧を供養せん事は、よくよく心をみたゆれすして備慈悲をおこして、かくのこときこときの雜善根をもは修せしめさせ給へ、と御すすめ候へし。

一、この世のいのりに念佛の心をしらすして佛神にも申し、經をも誦し書き、堂をもつくらむと、それこそさきのことく候へし。せめては又後世のためにせはつかまつらはこそ候はめ。その要用事なしとおぼせ候へからず。專修をさぶるえぬ行にてもあらさりけりともおぼしめし候へし。

一、念佛を申す事、様々の義は候へとも、たゞ六字をとなふるばかりに、一切はをさまりめて候也。心には願をたのみ、口には名號をとなへて、手にはかすをとりとるはかりなり、つねに心にかくるか、きわめたる決定の業にて候也。念佛の行はもとより行住坐臥時處諸縁をえらはす、身口の不淨をもきはぬ行にて候へは、樂行往生とは申つたへて候也。ただしその中にも心をきよくして申すをは第一の行と申候也。たゞ淨土を心にかくれば、心淨の行法にて候也。かきやうに御すすめ候へし。きやうにつねに申させ給はんひ候はんをは、とかく申すへき様も候はす。わか身なからもしかるへくて、このたひ往生のたひすへしとおぼしめし候へして、ゆめゆめこの心よくよくつよくならせ給へし。

一、念佛の行を信せぬ人にあひて論し、又あらぬ行の異計の人々にむかひて執論候へからず。あなちちに別異解異學の人々を見てはあなつりそしる事候まし。いよいよ重罪の人にもなまじし候はん事、不便に候。おなじ同心に極樂をねかひ念佛を申さん人をは、たゞ卑賤の人なりとも、父母師匠の慈悲にもおとらすおぼしめすし候へし。今生の財寶のともしからんにも、ちからをくわへ給へし。さりながらも、すこしも念佛に心をかけ候はんをは、よくよくすすめ給ふへし候し。

これも彌陀如來の御みやつかへとおぼしめし候へしすへく候也。釋迦如來滅後よりこのかた、次第に小智小行にまかりなりて候也。われもわれもと智慧ありかほに申す人々は過にできとり候へし。せめては録内の經教をたにもきかず見す、いかにいはんや録のほかの經教を見ざる人の智慧ありかほに申すは、井のちもそのかへるにたり。隨分に震旦日本の聖教をとりあつめて、ひきまこのあひたかんかへて候也、念佛を信せぬ人はさきの世に重罪をつくりて、地獄にひきさくありて、又地獄外にはやく返るへき人也。たとひ千佛世にいてて、念佛はまたく往生の業にあらず念仏よりほかにまた往生の業ありとしへ給ふとも信すへからず。これは釋迦如來彌陀よりはしめて、恆漚沙の佛の證誠しめ給へる事なれはとおぼしめして、御心さし金剛よりもかたくして、一向專修の御變改條あるへからず。もし論し申さん人をは、これへつかはして、たて申さんやうをきけとおぼせ候へし。様々の裏証文かきしるしてまいらすへく候へとも、たゞこころこれにすぎ候まへからず。又娑婆世界の人は、餘の淨土をねかはん事は、弓なくして末空の鳥をとり、足なくしてたかき木すゑのはなををたらんとせんかとし。かならず專修の念佛は、現當のいのりとなり候也。これ略してかくのとし。これも經の説にて候也。又御うちの人々には、九品の業を人のねかひにしたかひて、はしめおわたりたへ候ひぬへきやうほとに御すすめ候へしきなり。あなかしこあなかしこ。

「要義問答」〔要義問答〕

ま事にこの身には、道心のなき事と、やまひとはかりや、なけきに

て候らん。世をいとなむ事なければ、四方に馳走せず。衣食ともにかけたりといへとも、生命をおしむ心切ならぬすは、あなかにうれへとするにおよはす。心をやすくせんためにも、すて候へき世にこそ候めれ。いはんや无常のかなしみは、目のまえにみてり。いつれの月日をおはりの時と期せん。さかへあるものもひさしからず。いのちあるものも又うれへあり。すへていとふへきは六道生死のさかひ、ねかふへきは浄土菩提也。天上にむまれてたのしみにほころといへとも、五衰退没のくるしみあり。人間にむまれて國王の身をうけて、一四天下をはしたかふといへとも、生老病死愛別離苦怨憎會苦の一事もまぬかる事なし。たとひこれらの苦なからんすら、三惡道に返るおそれあり。心あらん人、いかかいとはさるへき。うけかたき人界の生をうけて、あひかたき佛教にあふ。ひこのたひ出離をもとめさせ給へ。

問。おほかたはさこそはおもふ事にて候へとも、かやうにおほせらるることはにつきて、左右なく出家をしたりとも、心に名利をはなれたる事もなくし、持戒清浄なる事なく无道心にて人に謗をなされん事、いかかとおほへ候。それも在家にありておほくの輪廻の業をまさんよりは、よき事にてや候へき。

答。たわふれにあまのころもをき、酒にまひて出家をしたる人、みな佛道の因となりきと舊き物にもかきつたへられて候。往生の十因と申す文には、勝如聖人の父母ともに出家せし時、おとこはとし四十一、妻は三十三なり。修行の僧をもちて師としき。師ほめていはく、衰老にもいたらず、病患にものそます、いま出家をもとむ。これ最上の善根也とこそはいひけれ。釋迦如來、當來導師の弥勒慈尊に付屬し

給ふにも、破戒重惡のともからなりといふとも、頭をそり、衣をそめ、袈裟をかけたらんものぢは、みななんちにつくところは、おほせられて候へ。されは破戒なりといへとも、三會得脱なをたのみあり。ある經の文には、在家の持戒には、出家の破戒はすくれたりところを申す候へ。まことに佛法流布の世にむまれて、出離の道をゆりえて、解脱幢相の衣をかたにかけ、釋氏子につらなりて、佛法修行せさん候、まことにたからの山に入りて、手をむなしくして返るためし也。

問。まことに出家なんとしては、さすかに生死をはなれ菩提にいたらん事をこそはいとなみにて候へけれ。いかやうにかつとめ、いかやうにかねかひ候へき。

答。安樂集にいはく、大乘の聖教によるに二種の勝法あり。一には聖道、二には往生淨土也。穢土のなかにしてやかて佛果をもとむるは、みな聖道門也。諸法の實相を觀して證をえんとし、法華三昧を行して六根清浄をもとめ、三密の行法をこらして即身に成佛せんとおもふふ、あるいは四道の果をもとめ、又三明六通をねかふ、これみな難行道也。往生淨土門といふは、まつ淨土へむまれてかしこにてさとりをもちらき、佛にもならんとおもふ也。これは易行道といふ。生死をはなるるみちみちおほし。いつれよりもいらせ給へ。

問。されはわれらかこときのおろかなるものは、淨土の往生をねかひ候へきか。いかん。

答。安樂集にいはく、聖道の一種はいまの時には證しかたし。一には大聖をさる事はるかにとをきによる。二には理はふかくして、さとりはすくなきによる。このゆへに大集月藏經にいはく、わか末法の時

の中の億々の衆生、行をおこし道を修するに、よまた一人もうる物はあらず。まきことにいま末法五濁惡世也。たた淨土の一門のみありて通入すへきみち也。ここをもて諸佛の大悲、淨土に歸せよとすめ給ふ。一形惡をつくれとも、たたよく心をかけて、ま事をもはらにして、つねによく念佛せよ。一切のもろものさはり自然にのそこりて、さためて往生をう。なんぞ思ひはからずして、さる心なきやといへりふ。永觀のゆはのたまはく、眞言止觀は理ふかくしてさとりかたく、三論法相は道かすかにしてまとひやすしなんと候。まことに觀念ゆもたへす行法にもいたらさらん人は、淨土の往生をとけて、一切の法門をもやすくさとらせ給はんは、よく候ひなんとおほへ候。

問。十方に淨土おほし。いつれをかねかひ候へき。兜率の往生上生をねかふ人もおほく候。いかか思ひさため候へき。

答。天台大師の給はく、諸教所讚多在彌陀 故以西方而爲一順と。又顯密の教法の中にもはら極樂をすすむる事は、稱計すへからず。惠心の往生要集に、十方に對して西方をすすめ、兜率に對しておほくの勝劣をたて、難易相違の證據ともをひけり。たつね御らんせさせ給へ。極樂この土に縁ふかし。彌陀は有縁の教主也。宿因のゆへ、本願のゆへ、たた西方をねかはせ給へきとこそおほへ候へ。

問。まことにさては、ひとすちに極樂をねかふへきにこそ候なれ。極樂をねかはんには、いつれの行かすくれて候へき。

答。善導釋しての給はく、行に二種あり。一には正行、二には雜行。正の中に五種の正行あり。一には禮拜の正行、二には讚嘆供養の正行、三には讀誦の正行、四には稱名の正行觀察正行、五には觀察の正行稱

名の正行也。一に禮拜の正行といふは、禮せんにはすなはちかのほとけを禮して、餘禮をましへされ。二に讚嘆供養の正行といふは、讚嘆せんにはすなはちかのほとけを讚嘆供養して、餘の讚嘆供養をましへされ。三に讀誦の正行といふは、讀誦せんには彌陀經等の三部經を讀誦して、餘の讀誦をましへされ。四に稱名の正行といふは、稱せんにはすなはちかのほとけを稱して、餘の稱名をましへされ。觀察の正行といふは、憶念觀察せんにはかの土の二報莊嚴等を觀察して、餘の觀察をましへされ。五に觀察の正行といふは、憶念觀察せんにはかの土の二報莊嚴等を觀察して、餘の觀察をましへされ。稱名の正行といふは、稱せんにはすなはちかのほとけを稱して、餘の稱名をましへされ。この五種を往生の正行とす。この正行の中に又二あり。一には正、二には助也。稱名をもては正とし、禮誦等をもては助業となつく。この正助二行をのそきて、自餘の修衆善はみな雜行となつく。又釋していはく、自餘の衆善はみな善となつくといへとも、念佛に尤くらふれば、またく比較にあらずとの給へり。淨土をねかはせ給はは、一向に念佛をこそは申させ給はめ。

問。餘行を修して往生せん事はかなひ候ましや。されとも法華經には、即往安樂世界阿彌陀佛所といひ、密教の中にも決定往生の眞言、滅罪の眞言あり。諸教の中に淨土に往生すへき功力をとけり。又穢土の中にして佛果にいたるといふ、かたき德をたに具せらん教を修行して、やすき往生極樂に廻向せは、佛果にかなふまでこそかたくとも、往生はやすくや候へきとこそおほへ候へ。又おのつから聽聞なんとなうけ給はるにも、法華と念佛ひとつ物と釋せられ候。ならへて修せん

に、なにかくるしく候へき。

答。雙卷經に三輩往生の業をときて、ともに一向専念无量壽佛との給へり。觀无量壽經にもろもろの往生の行をあつめてとき給は、ふおはりに阿難に付屬し給ふところには、なんちこの語をたもて。このことはをたもてといふは、无量壽佛のみ名をたもてと也とき給ふ。善導觀經を釋しての給ふに、定散兩門の益をとくといへとも、佛の本願はをのそむれは一向にもはら彌陀の名號を稱せしむるにありといふ。おなしき經の文に、一々の光明は十方世界の念佛の衆生をてらして、攝取してすて給はすとけり。善導釋しての給はふには論せず、餘の雜業のものをてらし攝取すといふ事をは論せずと説かす候。餘行のものふふつとむまれすといふにはあらず。善導も廻向してむまるへしといへとも、もろもろの疎雜の行となつとこそはおほせられたれ。往生要集の序にも、顯密の教法その文ひとつにあらす。事理の業因その行これおほし。利智精進の人はいまたかたしとせず。予かこときの頑魯の物、あはたやすからんや。このゆへに念佛の一門によりて經論の要文をあつむ。これをひらきこれを修するに、さとりやすく行しやすしといふ。これらの證據あきらめつへし。教をえらふにはあらず、機をはからふ也。わかちからにて生死をはなれん事、はけみかたくして、ひとへに他力の彌陀の本願をたのむ也。先德たちおもひはからひてこそは、道綽は聖道をすてて淨土の門にいり、善導は雜行をとめて一向に念佛して三昧をえ給ひき。淨土宗の祖師、次第にあひつけり。わつかに一兩をあく。この朝にも恵心永觀なんといふ自宗他宗、ひとへに念佛の一門をすすめ給へり。專雜二修の義はしめて申に

およはず。淨土宗の文おほく候、こまかに御らんす候へし。又即身得道の行、往生極樂におよはさらんやと候は、ま事にいはれたるやうに候へとも、なにかにも宗と申す事の候そかし。善導の觀經の疏にいはく、般若經のときは空惠をもて宗とす。維摩經のときは不思議解脱をもちて宗とす。いまこの觀經は觀佛三昧をもちて宗とし、念佛三昧をもちて宗とすといふかことき。法華は眞如實相等の妙理を觀して證をとまり、現身に五品六根の位にかなふ、これをもちて宗とす。又眞言には即身成佛をもちて宗とす。法華にもおほくの功力をあけて經をほむるついでに、即往安樂ともいひ、又即往兜率天上ともいふ。これは便宜の説也。往生をむね宗とするにはあらず。眞言も又かくのことし。法華念佛一つなりといひて、ならへて修せよといはは、善導和尚は法華維摩等を誦誦しき。淨土の一門にいりにしよりこのかた、一向に念佛してあえて餘の行をましふる事なかりき。しかのみならず淨土宗の祖師あひつゆきて、みな一向に名號を稱して餘業をましへされとすすむ。これらを案して專修の一行にいらせ給へとは申すなり。

問。淨土の法門に、まつなになをみて心つき候なん。

答。經には雙卷、觀无量壽、小阿彌陀經等これを淨土の三部經となつく。文には善導の觀經の疏、六時禮讚、觀念法門、道綽の安樂集、慈恩の西方要決、懷感の群疑論、天台の十疑論、わか朝の人師には恵心の往生要集なんこそは、つねに人に見るものにて候へ。たたなを御らんせすとも、よく御心えて念佛申させ給ひはんに、往生なに事かうたかひ候へき。

問。心をは、いかやうにかつかひ候へき。

答。三心を具足せさせ給へ。その三心と申すは、一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心なり。一に至誠心といふは眞實の心也。善導釋しての給はく、至といふは眞の義、誠といふは實の義。眞實の心の中に、この自他の依正二報をいとひすてて、三業に修するところの行業に、かならず眞實をもちゐよ。ほかに賢善精進の相を現して、内に虚假をいたく物は、日夜十二時につとめおこなふ事、かうへの火をはらふかごとくにすれとも、往生をえすといふ。たた内外明闇をはえらはす、眞實をもちゐるゆへに至誠心となつく。二には深心といふはふかき信也。決定してふかく信せよ。自身は現にこれ罪惡生死の凡夫也。曠劫よりこのかたつねにしつみつねに流轉して、出離の縁ある事なし。又決定してふかく信せよ。まかのあみたほとけの四十八願をもて衆生を攝受してうけおさめて、うたかひなくうらもひなく、かの願力にのりてさためて往生すと。あふきねかはくはほとけのみことはをは信せよ。もし一切の智者百千萬人きたりて、經論の證をひきて、一切の凡夫念佛して往生する事をえすといはんに、一念の疑退の心をおこすへからず。たたこたへていふへし。なんちかひくところの經論を、信せざるにはあらず。なんちか信するところの經論は、なんちか有縁の教。わか信するところは、わか有縁の教。いまひくところの經論は、菩薩人天等に通してとけり。この觀經等の三部は、濁惡不善の凡夫のためとき給ふ。しかればかの經をとき給ふ時には、對機も別に、所るも別に、利益も別なりき。いまきみかうたかひをきくに、いよいよ信心を増長す。もしは羅漢辟支佛、初地十地の菩薩十方にみち

みち、化佛報佛ひかりをかかやかし虚空にみしたをはきて、むまれすとの給はは又こたへていふへし。一佛の説は一切の佛の説におなし。釋迦如來のとき給ふ教をあらためは、制止し給ふところの殺生十惡等のつみをあらためて又おかすへしからむや。さきのほとけそら事し給はは、のちのほとけも又そら事し給ふへし。おなし事ならば、たた信しそめたる法をあらためしといひて、なかく退する事なかれ。かるかゆへに深心也。三に廻向發願心といふは、一切の善根をことごとくみな廻向して、往生極樂のためとす。決定眞實の心のうちに廻向して、むまるるおもひをなすなり。この心深信なる事金剛のことくにして、一切の異見異學別解別行の人等に動亂破壊せられされ。

いまさらに行者のために一つのたとへをときて、外邪異見の難をふせかん。人ありて西にむかひて百里千里をゆくに、忽然として中路に二つの河あり。一つはこれ火のかわ、みなみにあり。二つにはこれ水のかわ、きたにあり。おのおのひろさ百歩、ふかくしてそこなし。南北にほとりなし。まさに水火の中間に一つの白き道あり。ひろさ四五寸はかりなるへし。このみちひんかしのきしより西の岸にいたるまですに、なかき百歩。そのみつの波浪交過してましわりすきて、道をうるをす。火焰又きたりて道をやく。水火あひましはりてつねにやむ事なし。この人すてに空曠のはるかなるところにいたるに、人なくして群賊惡獸あり。この人ゆひとりゆくありくを見て、きをひきたりてころさんとす。この人死をおそれ、たちにはしりて西にむかふ。忽然としてこの大河を見るに、すなはち念言すらく、南北にほとりなし。中間に一つの白道を見る。きわめて狹少也。二つの岸あひさる事ちか

しといへとも、いかかゆくへき。今日さためて死せん事うたかひなし。まさしく返らんとおもへは、群賊悪獸やうやくきたりせむ。南北にさはしらんとおもへは、惡獸毒蟲きおひきたりてわれにむかふ。まさに西にむかひて道をたつねて、しかもさらんとおもへは、おそらくはこの二つの河におちぬへし。この時おそる事いふへからず。すなはち思念すらく、返るとも死し、又さるとも死せしむ。一種としても死をまぬかれざるもの也。われむしろこのみちをたつねて、さきにむかひてしかもさらん。すてにこのみちあり。かならずわたるへしと。このおもひをなす時に、東の岸にたちまちに人のすすむるこゑをきく。きみ決定してこのみちをたつねてゆけ。かならず死の難なけん。住せはすなはち死しなん。西の岸のうゑに人ありてよはひていはく、なんち一心にまさしく念して、身心いたりてみちをたつねて直にすすみて疑怯退心をなさざれとす。あるいは一分二分ゆくに、群賊等よはひていはく、きみ返りきたれ。かこのみちははげしくけあしくあしきみち也。すぐる事をうへからず。死しなん事うたかひなし。われらか衆は惡しき心なしと。この人、あひむかふによはふこゑをきくといへともかえりみず。直にすすみて道を念してしかもゆくに、須臾にすなはち西の岸にいたりて、なかくもろもろの難をはなる。善友あひむかひてよろこひやむ事なし。これはこれたとへ也。次にたとへを合すといふは、東の岸といふはすなはちこの娑婆の火宅にたとふる也。群賊惡獸いつはりちかつくといふは、すなはち衆生の六根六識六塵五陰四大也。人なき空廻の澤といふは、すなはち惡友にしたかひて、まことの善知識にあはさる也。水火の二河といふは、すなはち衆生の貪愛は

水のことく、瞋恚憎は火のことくなるにたとふる也。中間の白道四五寸といふは、衆生の貪瞋煩惱の中によく清淨の願往生の心をなす也。貪瞋こわきによるかゆへにすなはち水火のことしとたとふる也。願心すくなきかゆへに由道のことしとたとふる也。水波つねにみちをうるおすといふは、愛心つねにおこりて善心を染汚する也。又火焰つねに道をやくといふは、すなわち瞋嫌の心よく功德の法財をやく也。人、みちをのほるに直に西にむかふといふは、すなはちもろもろの行業をめぐらして、直に西にむかふにたとふる也。東の岸に人のこゑのすめやるをききて、道をたつねて直に西にすすむといふは、すなはち釋迦はすてに滅し給ひてのち、人見たてまつらされとも、なを教法ありてすなわちたつねゆへし。これをこゑのことしとたとふる也。あるいはゆる事一分二分するに、群賊等よはひ返すといふは、別解別行惡見人等みたりに見解をときてあひ惑亂し、およひみつから罪をつくりて退失するにたとふる也。西の岸のうゑに人ありてよはふといふは、すなはち彌陀の願の心にたとふる也。須臾にすなはちにしのきしいたりて、善友あひ見てよろこふといふは、すなはち衆生のひさしく生死にしつみて、曠劫により輪廻し迷到し、みつからまといひて解脱するによしなし。あふきて釋迦發遣して西方にむかはえしめ給ふ。彌陀の悲心まねきよはひ給ふによりて、二尊の心に信順して水火の二河をかえりみず、念々にわする事なく、かの願力の道に乗してこの道にいのちをすておはりてのち、かのくににむまるる事をえて、ほとけを覓たてまつりてとあひみて、慶喜樂する事はまりなからん。行者行住坐臥の三業に修するところ、晝夜時節を問ことなく、つねにこのさと

りをなし、このおもひをなすかゆへに廻向發願心といふ。又廻向といふは、かのくにむまれおはりて、大悲をおこして生死に返りいりて、衆生を教化するを廻向となつく。三心すてに具すれば、行と志との成せずといふ事なし。願行すてに成して、もしむまれずといははこのことはある事なけん。已上善導の釋の文なり。

問。阿彌陀經の中に、一心不亂と候そかしな。これ阿彌陀佛を申さん時、餘事をすこしもおもひませ候ましきにや。一念念佛申さん程、物をおもひませさらん事は、やすく候へは、一念往生にはもる人候はしとおほへ候。又いのちのおはるを期として、餘念なからん事は、凡夫の往生すへき事にても候はす。この義いかか心え候へき。

答。善導この事を釋しての給はく、ひとたひ三心を具足してのち、みたれやふれざる事金剛のことゆきにて、いのちのおはるを期とするを、なつて一心といふ候。阿彌陀佛の本願の文に、設我得佛十方衆生 至心信樂欲生我國 乃至十念 若不生者不取正覺といふ。

この文に至心といふは、觀經にあかすところの三心の中の至誠心にあたり。信樂といふは深心にあたり。欲生我國は廻向發願心にあたり。これをふさねていのちのおはるを期として、みたれぬものを一心とは申す也。この心を具せらんもの、もしは一日もしは二日乃至十一聲十聲に、かならず往生する事をうといふ。いかてか凡夫の心に、散亂なき事候へき。されはこそ易行道とは申す事にて候へ。雙卷經の文には、横截五惡趣 惡趣自然閉 昇道无窮極 易往而无人ととり。ま事にゆきやすき事、これにすきたるや候へき。劫をつみてむまるといはは、いのちもみしかく身もたへさらん人、いかかとおもふへきに、

本願に乃至十念といふ。願成就の文に乃至一念もかのほとけを念して、心をいたして廻向すれば、すなはちかの國にむまるる事をうといふ。

造惡のものむまれずといはは、觀經の文に五逆の罪人むまるととく。

もし世もくたり人の心もおろかなる時は、信心うすくしてむまれかたしといはは、雙卷經の文に當來之世 經道滅盡 我以慈悲哀愍 特留

此經 止住百歲 其有衆生值此經者 隨意所願皆可度へ云云。その時の衆生は三寶の名をきく事なし。もろもろの聖教は龍宮にかくれて一巻もととまる物ことなし。たた邪惡惡邪无信のさかりなる衆生のみあり。みな惡道におちぬへし。彌陀の本願をもちて、釋迦の大悲ふ

かきかゆへに、この教をととめ給へたまひつる事百年也。いはんやこのころは、これ末法のはしめ也。萬年ののちの衆生におとらんや。かるかゆへに易往といふ。しかりといへとも、この教にあふ物はかたし。

く、又おのつからきといへとも、信する事かたきかゆへにしかもれは無人といふ。ま事にことたりなるへし。阿彌陀經にもしは一日もしは二日乃至七日、名號を執持して一心不亂なれば、その人命終の時に

阿彌陀佛もろもろの聖衆と、現にその人のまえにまします。おはる時心顛倒せずして不顛倒して、阿彌陀佛の極樂國土に往生する事をうといふ。この事をとき給ふ時に、釋迦一佛の所説を信せさらん事をおそ

れて、六方の如來同心同時におのおの廣長の舌相をいたして、あまねく三千大千世界におほひて、もしこの事そら事ならは、わかいとすところの廣長の舌やふれたたれて、口にかへりいる事あらしとちかひ給

ひき。經の文釋の文あらは也に候。たたく御ころえ候へ。又大事を成し給ひし時はみな證明ありき。法華をとき給ひし時は多寶一佛證

明し、般若をとき給ひし時は四方四佛證明し給ふ。しかりといへとも一日七日の念佛のことゝきに證誠のさかりなる事はなし。ほとけもこの事をま事ことに大事におほしめしたるにこそ候めれ。

問。信心のやうはうけ給はりぬ。行の次第いか候へき。

答。四修をこそは本とする事にて候へ。一には長時修、乃至二には愍重修また恭敬修となつく、三には無間修、四には无餘修也。一に長時修といふは慈恩の西方要決にいはいはく、初發心よりこのかたつねに退轉なき也。善導はいのちのおはるを期として、誓て中止せされ中にととまされといふ。二に恭敬修といふは極樂の佛法僧寶において、つねに憶念して尊重をなす也。往生要集にあり。又要決にいはいはく、恭敬修、これにつきて五あり。一には有縁の聖人をうやまふ。二には有縁の聖教像と教とをうやまふ。三には有縁の善知識をうやまふ。四には同縁の伴をうやまふ。五には三寶をうやまふ。一に有縁の聖人をうやまふといふは、行住坐臥に西方をそむかず、涕唾便利に西方にむかはされといふ。二に有縁の像と教とをうやまふといふは、阿彌陀佛の像をあまねくつくりもかきもせよ。ひろくする事あたはすは、一佛二菩薩をつくれ。又教をうやまふといふは、彌陀經等を五色のふくろにいれて、みつからもよみ他をおしへてもよませよ。像と經とを室のうちに安置して、六時に禮讀し香花を供養すへし。三に有縁の善知識をうやまふといふは、淨土の教をのへんものを、もしくは千由旬よりこのかた、ならひに敬重し親近供養すへし。別學のものをも惣してうやまふ心をおこすへし。もし輕慢をなさは罪をうる事きわまりなし。すすみめても衆生のために善知識となりて、かならず西方に歸する事をも

ちあよ。この火宅に住せは、退沒ありていかたきかゆへ也。火界の修道はなはたかたかきかゆへに、すすめて西方に歸せしむ。ひとたひ往生をはえつれば三學自然に勝進して、又萬行ならひにそなはるかゆへに、彌陀の淨國は造惡の地なし。四に同縁のともをうやまふといふは、おなしく業を修する物也。みつからはさほとりおもくして獨業は成せすりといへとも、かならずよきともによりて、まさに行をなす。あやうきをたすけ、あやうきをすくふ事、同伴の善縁也。ふかくあひたのみておもくすへし。五に三寶をうやまふといふは、繪像木佛、主乘の教旨、聖僧菩薩破戒のともからまてうやまひをおこし、慢を生ずる事なかれ。木のかたふきたるはか、たうるにはまかれるによるかことし。事のさはりありて西にむかふにおよはすは、たた西にむかふおもひをなすべしにはしかず。三に无間修といふは、要決にいはいはくつねに念佛して往生の心をなせ。一切の時において、心につねにおもひたくむへし。たとへはもし人他に抄掠せられて、身下賤となりて艱辛をうく。たちまちに父母をおもひて本國にはしり返らんと思ふ。てゆくへきはかり事、いまたわきまへすして他郷にあり。日夜に思惟すゑくるしみたへしのふへからず。時としても本國をおもはすといふ事なし。はかり事をなす事をえて、すてに返りて達する事をえて、父母に親近してほしきままに歡娛するかことし。行者も又しか也。往因の煩惱に善心を壞亂せられて、福智の珍財ならひに散失して、ひさしく生死にしつみて、六道に駈馳してくるしみ身心をせむ。いま善縁にあひて、彌陀の慈父をききて、まさに佛恩を念して、報盡を期として心につねにおもふへし。心々相續してころにあひつきて餘業をましへ

され。四に无餘修といふは、要決にいはく、もはら極樂をもとめて禮念する也。諸餘の行業を雜起せされ。所作の業は日別に念佛すへし。

善導のの給はく、もはらかのほとけの名號を念し、もはら礼し、もはらかのほとけおよびかの土の一切の聖衆等をほめて、餘業をましへされ。專修のものは百はすなはち百なからむまれ、雜修のものは百か中にわつかに一二也。雜縁にちかきねかひつきぬれば、みつからもさへ、他の往生の正行をもさふる也。なにをもちてのゆへに。われみつから諸方を見きくに、道俗の解行不同にして專雜こと也。たた心をもはらになすさは、十はすなはち十なからむまる。雜修のものは、千か中一つもえずといふ。又善導の御弟子釋しての給はく、西方淨土の業を修せんとおもはん物は、四修おつる事なく、三業ましわる事なくして、一切の諸願諸術を廢してたた西方の一行と一願とを修せよとこそ候へ。

問。一切の善根は魔王のためにさまたけらる。これはいかかして對治し候へき。

答。魔界といふ物は衆生をたふろかす物也。一切の行業は自力をたのむかゆへ也。念佛の行者は、身をは罪惡生死の凡夫とおもへは、自力をたのむ事なくして、たた彌陀の願力にのりて往生せんとねかふに、魔縁たよりをうる事なし。觀惠をこらす人にも、なを九境空界の魔事ありといふ。彌陀の一事には、もとより魔事なし。果觀人清淨なるかゆへにといへり。佛をたふろかす魔縁なければ、念佛のものをさはまたくへからず。他力をたのむによるかゆへ也に。百丈の石を船におきつれば、萬里の大海をすくるといふかことし。又は念佛の行者のまへ

には、彌陀觀音つねにきたり給ふ。二十五の菩薩、百重千重に圍繞護念し給ふに、たよりをうへからず。

問。阿彌陀佛を念するに、いかはかりのつみをか滅し候。

答。一念によく八十億劫の生死の罪を滅すといひ、又但聞佛名二菩薩名 除无量億劫生死之罪なんと申候そかし。

問。念佛と申候は、佛の色相を念し候か。

答。佛の色相光明を念するは觀佛三昧なり。報身を念し同體の佛性を觀するは、智あさく心すくなきわれらば境界にあらず。善導の給はく、相を觀せすしてたた名字を稱せよ。衆生さはりおもくして觀成する事かたし。このゆへに大聖あはれみをたれて、稱名をもはらにすすめ給へり。心はかすかにして、たましゐ十方にとひちるかゆへ也といふ。又本願の文を善導釋しての給はく、若我成佛 十方衆生願生我國稱我名號 下至十聲 乘我願力 若不生者不取正覺 彼佛今現在世成佛 當知 本誓重願不虛 衆生稱念必得往生とおほせられて候。とくとく安樂の淨土に往生せさせおはしまして、彌陀觀音を師として法華の眞如實相等の妙理、般若の第一義空、眞言の即身成佛、一切の聖教心のままにさとらせおはしますへし（五本）。

（いちかわ さだたか 仏教学科）

二〇一七年十一月十五日受理